

第一回

免疫の不思議から、いのちとこころを見つめ直しましょう

NPO免疫治療法懇談会理事長 酒生文弥（さこう・ふみや）

気がつけば当年5回目の年男、中年真っ盛りの私ですが、浄土真宗の在家僧侶ながら、ご縁あってガンなど難病患者様のお世話をするNPOをやらせて頂いております。

昨年春まで、家柄と財力ばかりを誇る都内某大寺院の婿養子殿としてののうと暮らしておりましたが、葬式・法事ばかりに明け暮れ貴族意識紛々たる「名利」の現実に耐えきれず、「檀家様主権の、生者のための寺院に！」と改革を試みたところ、「家督」を脅かすアカの謀反人だと追い出されました。前途を模索中、10年来ご親交を頂いてきた（医）珠光会理事長蓮見賢一郎医師から現職を委託され、ようやく仏法を活かせる天職を得たかと、報恩の思いで働かせて頂いております。

珠光会は、今や難病治療のキーワードにさえなっている「免疫」を活用した、「ガンワクチン」療法を世界に半世紀も先駆けて臨床治療してきた、ガン闘病者には広く知られた医療機関です。ド文科系の私でも、門前の小僧よろしく耳学問していると、免疫系という自然治癒力の不思議を知るにつけ、ただただ驚嘆する毎日です。

免疫は、骨髄で生まれ胸腺という器官で練兵される、専守防衛の細胞自衛隊です。生活に追われる還暦頃までは、ストレスに打ち勝つ精鋭部隊（T細胞、B細胞等）中心に激しい生き様を支えますが、胸腺がなくなる初老期以降は、大腸周辺のパイエル官由来の、穏やかながら粘り強く命を守る、より原始的な細胞部隊（NK細胞、マクロファージ等）へと、戦力が交替していきます。脳みそは120年もつ、という説が正しいなら、どうやら人間は、前半生は自立して家族を養うため俗世間で戦闘的に働き、後半生は、聖人とまではいかなくても、後身や孫を育てるなど穏やかに世に尽くす生き方をすれば、長く豊かな天寿を完うできるように創られている様です。赤いチャンチャンコを着て、もう一度赤ちゃんに戻って人生を再出発する儀式は、科学的にも根拠のあることだったのです。ちなみに、免疫軍の司令官・樹状細胞は、まるでアメーバの様な姿ですが、原初の命、いわば最初のご先祖様がずっと体の中に生きておられて、私たちの生命を守っていて下さる様です。

「こころ」が免疫・健康に大いに影響することは、古来「病は気から」として知られていましたが、安保徹先生の『免疫革命』で今や大ブームです。また、物心つく頃から延べ何万人というガン闘病者を見てこられた蓮見先生は、自ら病院を営まれながらも、病院は大手術かICUが必要な時だけの緊急避難所であって、治癒成績からもQOLからも、「住み慣れた我が家で、愛する家族に看護られながら」訪問治療を受けて在宅治療するのがベストである、との信念をお持ちです。

病を得て、人はつくづく「生かされている自分」という真実に気付かされるものです。めざましい近未来医療の福音は、「不治の死病」を遠からず死語にしてくれそうですが、免疫を学び免疫療法に癒される体験を通じて、「いのち」や「こころ」そして「文明のあり方」まで、一緒に心ゆくまで懇談する。それが、私たちの願いです。どうぞお気軽にNPOIS-Jのドアを叩いて下さい。